

『ワシントン・ポスト』紙 1982年12月12日

文：ニナ・ハイド

誰にでも着られるシンプルなラインで話題を呼ぶ

最近のこと、三宅一生のショーのために戦艦イントレピッド号*に出かけた2,000名近くの観客の目に入ったのは、舞台に座っていたニューヨーク・コーラル・ソサイエティのメンバー40名で、この日本のデザイナーの新しいコレクション「プランテーション」の着やすそうで気楽に洗える木綿の服を身につけていた。三宅が大切にしたことは、ベンジャミン・ブリテンの輝かしい旋律「グロリアーナ」でショーの幕開けをすることだけではなく、これらの簡素で中間色の服は絶対に誰でも着ることができると提示することだった。

「これらの服をもっている人には、決まった着方をするだけでなく、いつ着るかとか、いかに着るかということのみずから発見して欲しいと思う」。「僕がデザインしたのは、デザインを決め込まないことだった」。ニューヨークのメトロポリタン美術館のコスチューム部門学芸員のステラ・ブラムは語る、「この太陽の下、何か新しいものが

ある—ファッションにはそれを気付かせる要素があるの。私のこの信念を三宅は生き返らせてくれた」。

三宅のコレクションではもっとも大切な要素は布であり、必要とあれば1年もの長い時間をかけてふさわしい布を開発する。これまでも、耕や農民による格子織りの一種であるしじら織りなど、日本の伝統的な織物の現代版を作りだしてきた。元来の模様の大さきや色を変えることもあり、ときには合成繊維を追加することもある。ウルTRASUEDEを最初に使ったのも彼で、これは後にホルストンによってポピュラーな製品になった……彼はあらゆるものからインスピレーションを受ける。当然のことながら、1977年には毎日デザイン賞を受けた。まったく異論の余地ないことだったが、ファッション・デザイナーとしては初の同賞受賞であり、通常は建築家や環境デザイナーに授けられてきた賞である。

現在、三宅がやりたいことは何か。すでに東京で実現したような学生たちへ向けたショーをパリとニューヨークでやること……

パリは伝統的な場所で、「新しい血を必要としている」と彼は語った。

「日本的なるものをフランスのものと一緒にすれば新しい動きが生まれるにちがいない。それはパリにとって良いことだとおもう」。い

や、ほかの地の人びとにとっても良いことになることうけあいだ。

(抜粋)

*1943年に進水した米国海軍の航空母艦。退役後、1982年にイン
トレピット海上航空宇宙博物館として開館した。